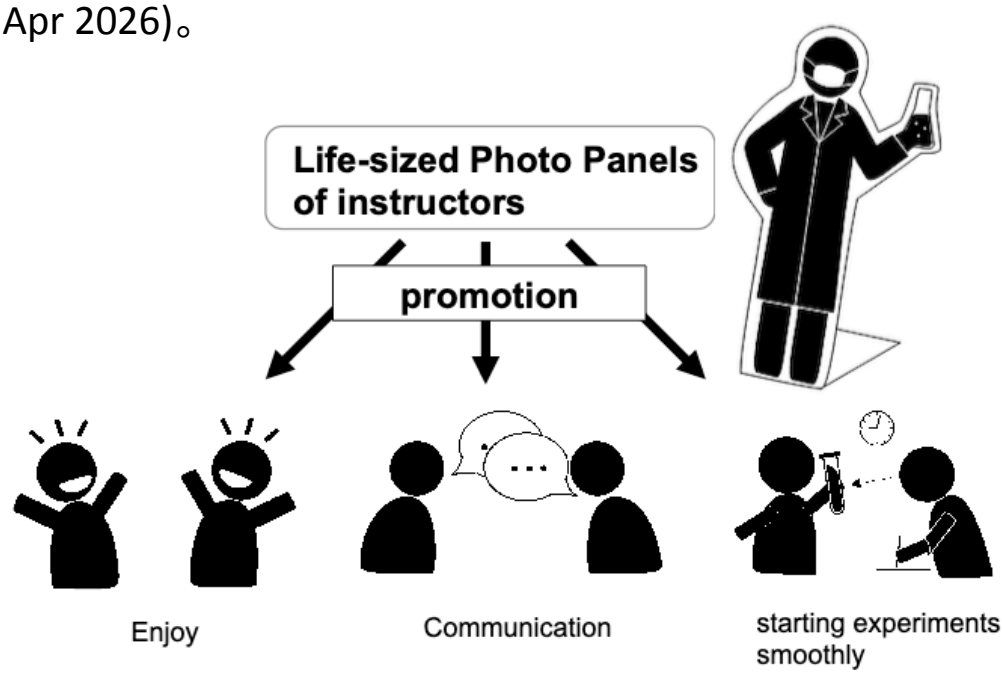
教員の等身大パネルを実習室に設置することによる教育環境の特性の変容

～ナッジ理論を利用した学生の実習への取り組む姿勢の変容の試み～

本学医学部卒前教育の機能系実習２ (従来また他大学での生理学実習が相当)では、各実習項目の最初に実習担当教員がミニレクチャーを行い、その後引き続き、各学生が実習を開始します。そこでは、学生がスムーズに実習に移行せず、躊躇している様子がしばしば認められます。また、新型コロナウイルス感染症への感染防御対策として、マスク・防護メガネ（ゴーグル）が指導されていたものの、防護メガネ（ゴーグル）の着用は不十分であり、指導教員が頻繁に注意を行うこともあります。

最近、公共政策や企業活動では、消費者等の行動変容のために、ナッジ理論が利用される場面が多い。今回我々は、感染防御対策をしている姿（マスク・防護メガネ着用）の教員の等身大パネルを作製し、実習室入り口に設置しました。実習終了後の事後評価アンケートを解析し、学生の実習への取り組む姿勢に変容が生じたかを検証しました。

等身大パネルを設置した実習群と設置しなかった実習群で比較したところ、設置した実習群では、「スムーズな実習の開始」、「指導教員とのコミュニケーション」、「実習を楽しんだ」という項目等において、有意に良好な結果が得られた。教員の等身大パネルの設置により、指導教員が主導する実習室内の緊張を軟化させ、ミニレクチャー後の実習への移行がスムーズとなったことが示唆され、今後の実習の実践上有意義な成果が得られたと考えられます。本成果の一部は、MedEdPublish誌に掲載されました (Published online 21 Apr 2026)。